読売歌壇

小池　光　選

独り身の息子が帰る「アジフライ美味しかったよ」と一言残して　宇都宮市　佐藤　順子

【評】あまりもの言わぬ息子だろう。年末年始に帰郷して、帰り際こう一言、つぶやくように言った。母はうれしい。アジフライという平凡で具体的な料理名がいい。

小説の残り数ページ日本酒を味わうようにちびりちびりと　白井市　上山　彰子

【評】読み出したら止まらぬ小説である。読み終わるのがもったいない。大団円に向かう最後の数ページを惜しむように読む。ちびりちびりがおもしろく、よく感じが出ている。

久しぶり耳鼻科に行きて幼子のすがる泣き声しみじみと聞く　八王子市　斎賀　勇

【評】身近に幼子がいるなら格別のことでないが、稀に聞くその泣き声は実に魅力あるもの。しみじみと聞き入るのである。

石舞台の中からのぞく冬の空　馬子の魂の青く燃ゆるや　下野市　川中子とよ子

音読をひとり暮らしの日課とし随筆集『笑』を今日は読みたり　北九州市　田浦チサ子

差し障りなきやりとりは足ることは無けれど人を傷つけもせず　岡山市　岩藤由美子

昭和史の師走の街の風物詩救世軍のジンタの響き　大網白里市　土屋　君江

「パパがねメールでサンタにプレゼントたのんでくれた」幼のささやく　宇都宮市　大門とよ子

冬の夜の星と三日月みた後に餃子を焼いたフライパン洗ふ　京都市　足立　紀子

浴槽に黄熟の柚子あふれしめかきわけて入るひとりの夕べ　久喜市　深沢ふさ江

栗木　京子　選

しばらくをひこばえついばむ群れ雀冬の備えかその身は太し　太田市　松島　純

【評】田畑が減って雀の餌が少なくなった地域もあるが、ひこばえ（切り株から出た芽）があって良かった。群れ雀の元気な動きに心が明るみ、「その身は太し」に安堵する。

五年前あなたがくれし手袋を外して記帳香典渡す　対馬市　神宮　斉之

【評】手袋をくれた「あなた」が亡くなり、葬儀に列席したのであろう。その人との交流をなつかしんで、贈り物の手袋をはめてきたのだ。手袋を外す下句のしぐさが悲しい。

発熱で休むとメールした後も子の弁当を急いで作る　東京都　佐藤　一郎

【評】自身の欠勤の届けを出したあとも、子の弁当を作らねばならない。メールと弁当という具体を通して朝の忙しさが伝わる。

利用者から俳句の宿題出されたり療法士さん頑張れ五七五　高槻市　山口佐智子

アイパッド開けば医師と会話するパジャマ姿の在りし日の吾子　東京都　大森　知子

よく喋るところに惹かれたんですと静かに語る娘のフィアンセ　大津市　高橋希巳江

多大なる心配かけし執刀医に賀状書きたし住所知らねど　坂戸市　納谷香代子

明治期に建てし尋常小学校景色のゆがむ窓ガラスなり　和歌山市　溝口　圭子

ベッドから寝ぼけまなこのわが足がもつれて着地遺影が笑う　赤磐市　黒岩　博美

娘来て足湯してくれ有難し月一回の約束事よ　千葉市　小林　昭

俵　万智　選

種を蒔く仕草でスマホを押す父が孫との会話に花を咲かせる　越谷市　あきやま

【評】ぽちぽちと画面を押す父の手つきを捉えた比喩が美しい。「会話に花を咲かせる」という慣用句、現代短歌では使いづらいが、種との響きあいで見事に生かしている。

かさぶたはできたら剝がすあなたから貰った傷が消えないように　大阪市　畑　依裕

【評】かさぶたは剝がすと痕が残る。それを逆手にとった表現。心の傷だけが、あなたとのつながりの証しなのだ。傷つけられた側なのに「貰った」というのがせつない。

銭湯の富士の麓でぼんやりと小舟のように行き交う裸　宇部市　常田　瑛子

【評】湯気に煙る銭湯のペンキ絵。富士山の手前に、海が描かれているのだろう。小舟の比喩で、味のある一枚の動く絵が完成した。

また今朝もとどこおりなく生み立ての玉子のように届く新聞　太田市　鈴木まり子

あなたとは雲の話をしてみたい白にも黒にも変われる雲の　仙台市　小野寺寿子

きみといる冬の日の部屋あたたかく結露の窓の隠す外界　富士見市　松本　尚樹

知るたびに失うものがある今日の分だけ丸くなった消しゴム　東村山市　月出里ひな

いつまでも本番がない模試としてこの一年が終わる気配だ　東京都　音羽　凜

世界一やさしい温度計だろうひたいに触れる母のひたいは　新宮市　小野小乃々

マンションの自治会所属（非常勤）ロビー勤務のクリスマスツリー　東京都　武藤　義哉

黒瀬　珂瀾　選

靖国より帰りし友を野に迎え東京行きしを羨しとも見き　大和郡山市　四方　護

【評】靖国神社に行ってきた友達。それは、家族が戦死したということだが、幼かった当時の作者にはそこが実感できなかったのだろう。遠い記憶にかすかな後悔がにじみます。

手のひらの上で豆腐を切るように殺陣あざやかな早乙女太一　札幌市　住吉和歌子

【評】刃を紙一重でかわしつつ、物の重みを感じさせない立ち回り。舞台上の太一くんの軽やかさをユニークな比喩で表現しました。

目も脚も老人性とつく病親しみ持ちて卒寿を目指す　福岡市　古賀　悦子

【評】病気として「老人性何々」との正式名称はつけども、つまりは「老化」という人の宿命。そんな身と心にかえって親しんで長生きしてやろうという、心意気の一首です。

充電や電池交換しなければ動かぬ物に頼るを「進歩」　滝沢市　小田佐枝子

背を掻きてやれば後足動かせりもう軍手には戯れぬわが犬　長野市　原田　浩生

黒部川源流を手で掬い飲む友と果たした長年の夢　守谷市　久保田洋二

手のひらの仏性に告ぐ正直に真面目に生きる人報われよ　奈良県　刈田　陽子

妹より届きしおせち逝きし母そっくりの味北国の味　東京都　高橋　信也

門松を荷台に積んだ軽トラが法定速度で師走を走る　横浜市　紺屋　小町

老人になれざる人の数多あり同窓会の物故者名簿　日南市　宮田　隆雄

◇投稿規定◇　はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名（ふりがな）、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、にほんばし蔵前郵便局留、読売歌（俳）壇、○○先生（希望選者名）係または読売新聞オンラインから　◇毎週月曜日に掲載　右の影絵はじゅけんせい